

「人々の暮らしもこまるだろうな。農民だけではない。年貢がとれなくなれば、武士の生活もこまる。」

「西郷どの、先ほどからだまっておられるが、何かお考えでもおありかな。」
だまって先輩の家老の話を聞いていた西郷頼母（さいごうたのも）（ぼしん）の父）は、腕組みをときながら、

「考えというほど、まだまどまっていけないのですが、湯川から城下の町中にひいている『かりがね堰』の水を、もつとたくさん城中にひき入れるしかないと思うのです。ただ、どのくらいひけるか、また、その影響はどうなるのか、それがまだわからないので調べさせております。だから、今しばらく待っていただきたいのです。」

「それは、だれに調べさせておられるのかな。」
藩の命令ではなく、個人的に調べさせたことなので、その名を言ってい